

慶本『平家物語』と『源平盛衰記』——住吉明神関係記事から——  
（『人文』昭和五六年八月）の⑤の例文で、筆者なりに注目したこ  
とがある。

(南都本・東寺執行本には湛増達が攻めたことが出てこない。又、当道系諸本のうち屋代本・小城本・百二十句本・中院本・両足院本・八坂本では、頼朝に援軍を依頼することがなく、見かねた忠房が降参したことになる)。一方、延慶本・長門本によれば、「平家余黨ノ生虜」の中に熊野別当行明法印なる者がいる。湛増との関係が全く記されていないので、甚だ分かりにくく、不透明な印象を残している。

熊野で育った者は「大ぢから」という捉え方があるようだ。先述の忠度がそうであった。行家も、当道系諸本のうち屋代本などには「大力」とあり、熊野育ちと言えるかどうか分からないが、文覚も諸本に「スクレタル大力ノ心猛キ」とある。この外、源平盛衰記には金剛左衛門俊行・力士兵衛俊宗という「十八歳にして五十人が力もちたりける」兄弟がいたことが記されている。

最後に、当然のことながら熊野が世を遁れた者の集まる所として描かれていることを指摘して、この稿を終えることにしたい。先述のように維盛と平盛俊の伯父という山伏とが熊野で出会っていた。平重衝の乳母子、後藤兵衛盛長は後年、熊野法師尾中法橋の後家の後見をしていたという(中院本・八坂本にはない)。又、延慶本・長門本、当道系諸本のうち屋代本・竹柏園本・小城本・百二十句本・覚一本によれば、行家は熊野に落ちて行く途中で捕えられた。猶、行家の太刀の鐔は、延慶本・長門本によると、熊野権現に献じられたという。

## 六

以上、「平家物語」に描かれた熊野について目を通して来た。それらの中では、重盛・維盛・六代の熊野参詣が重層して続いている風なのが印象深かった。又、これら後世菩提を祈る人々と並んで、文覚が熊野と関わりをもっているのも興味深い。しかし、こうした面についての考察は又、稿を改めることとし、今回は取り敢えず俯瞰したところで擱筆することにしよう。

(注一) 引用文で特に断っていないのは延慶本からのそれである。又、当道系諸本からの引用で、同様に特に断っていないのは屋代本からのものである。

(注二) 後述のように「新宮の浦」から熊野を拝むということが源平盛衰記に記されているが。

(注三) このことは以前、拙稿「平家物語における三島明神と春日明神」(『香椎潟』昭和五六年三月)で指摘した。

(注四) 頼朝はこの時、曾て重盛から受けた恩に言及している。しかし、侍従忠房の場合などを見れば、頼朝のこの言葉を素直に信じることは出来ない(尤も、忠房も「無<sub>レ</sub>隔打憑」で出て来たとは言えないのだが)。

(注五) 康頼によれば、これは「大橋慢ノ心」ということだが、延慶本(源平盛衰記)に記される「橋慢」を戒める言説については、拙稿「延

このような参詣を重ねているうち、九月上旬のある日、椰の葉に御告げが記されていたとされる。当道系諸本は、西御前（那智）での霊夢（源平盛衰記にもある。長門本にも類似の逸話があるが、本宮とする。）、康頼祝詞、椰の葉の霊異、卒都婆流しと続ける屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・小城本・百二十句本と、祝詞の後に霊夢と椰の葉の霊異とを続けて記す覚一本等その他の諸本とに分かれる。卒都婆流しは寧ろ巖島明神の霊験という色彩が濃い。殊に延慶本・長門本（源平盛衰記にはない）の卒都婆流しでは、一本が新宮に流れ着き、熊野別当の許へ届けられているが、放置されたという（延長慶本では、後、山伏が巖島のもの都入りと同日に都に持って来たとしている）。熊野権現に祈ったので康頼・成経は帰洛出来たという文脈にならねばならない筈だが、巖島明神が願いの届く場面では前面に出されているのである。

成経の父、成親も個人的な熊野詣でを行ったことがあると見られる。「熊野詣 天王寺詣ナムトニハ二瓦ノ三棟ニ造タル船ニ 次船ニ三十艘付テコソ有シ」と記されているので、全盛期には随分豪勢に淀川を下ったのであろう。

熊野別当増は、源氏・平氏のどちらに付くべきかを、神慮に仰いでいる。長門本・源平盛衰記・覚一本によれば、田辺の「新宮」（覚一本は「新熊野」）で祈願して、源氏に付くようにという託宣を得ている。しかし、それで満足出来ず（延慶本では最初から）、白鷄・赤鷄による鷄合わせを同所（延慶本では「若王子の御所」）で行い、白鷄の勝ちを見て、源氏への加担

を決めたという。

## 五

「平家物語」に出て来る、その他の熊野関係の記事についても言及して置きたい。

先の鷄合わせの逸話と関係するが、熊野が源氏・平氏に対してどのような態度をとったかは、案外に複雑なようだ。源氏の旗揚げの時点では新宮は源氏方、本宮は平氏方だが、那智については平氏方とする延慶本と源氏方と見做されるそれ以外の本とに分かれる。その後、治承五年二月十七日の頃には、別当増をはじめ「吉野十津河ノ悪黨等マテモ」源氏に寝返ったという風聞が流れている（当道系諸本のうち屋代本などは断定的な表現になっている）。そして、延慶本によると、養和元（一一八一）年十月には「熊野山惡徒等紀伊国ニシテ度々宮兵ト合戦」ということで、房覚僧正が呼び出されている。更に、翌年十月には全国的に反平家の動きが広まったということだが、勿論熊野の「僧徒」も例外ではなかった（延慶本・長門本・源平盛衰記以外は翌寿永二年のこととしている）。これらによると、熊野の方はかなり早くから源氏側に傾いていたように見える。とすれば、田辺は熊野から遠く離れているので、親平家の気分が強かったと考えるべきなのであろうか。寝返った後の増は頼朝の命を受けて、湯浅宗重の許にいた丹後侍従忠房を攻める。三箇月攻めて、多くの負傷者が出たので、頼朝の援軍を依頼するという始末なので、熊野法師の威勢もさっぱりである

は、維盛の遺跡巡り、追善供養という風である。

## 四

皇室、平家以外に目を移してみよう。

まず、頼朝に旗揚げを勧めた文覚だが、彼は延慶本によると、「道心ヲコシテ高野ニテ戒ヲ持チ熊野ニコモ」っている（大方の本は熊野籠りだけ）。高野山から熊野へという道筋は維盛を思わせる。四部合戦状本と屋代本は全く熊野との関わりに触れないが、それと大峯修行のみを記す八坂本以外は、十二月に那智の滝に三七日打たれた（延慶本・長門本では断食して三山を巡った後とのこと）ということを書いている。この時、文覚は、不動明王の遣した金迦羅・制多伽の二童子に守られたという。当道系諸本のうち覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本・両足院本では、その後、「那智に千日こもり 大峯三度」などを修したことになる。不動明王が出て来ることと言ひ、文覚と熊野との関りは他の場合と大きく異なる。これは、熊野での修行、しかも「荒行」という面を積極的に描いたことによるのであろう。

文覚以外の僧については、源平盛衰記に静憲法印の熊野参詣と、浄蔵貴所・行尊僧正がともに「大みね修行」の者であったことが記されているだけである。又、源平盛衰記には、金剛左衛門俊行・力士兵衛俊宗の母として「夕霧の板」と呼ばれる「山上無双の御子一生不犯の女」がいたことを伝えている。

出家した者としては、平康頼入道の熊野詣である。硫黄島に熊野権現を勧請したことを全く記さない源平闘諍録以外の「平家物語」諸本は、康頼を熊野信仰者として扱っている。特に、延慶本・源平盛衰記は三十三度参詣の志をもっていて、十五度を残しながら、流罪になったとしている（延慶本によれば、上皇の三度の御幸に毎度従い、個人的にその外十五度の参詣をしたという）。一方、延慶本ではその時まで一度も参詣をしたことがないことになっている藤原成経も、長門本では御幸に随行したり、個人的に参詣したりしていることになっているし、当道系諸本は「小将判官入道ハ（ハツマツ）自元熊野信シノ人ニテ」と同等の扱いになっている（但し、康頼入道がどちらとも先達を務めている）。延慶本では十八度も参詣したのに流罪になったのを「今生ノ栄花息災延命」を祈願した為と康頼が懺悔しているが、源平盛衰記を始めとする他本は特にそのことにこだわっていない。従って、延慶本の場合、康頼は「後生善所」の為に当初は祈ることになる。その康頼が、他本と同様に「今一度都へ帰させ給へ」と祈るのは、王子・王子の前で「ナレコ舞」を舞って（舞は長門本にもある）、本宮証誠殿の前まで上って来た時であった。猶、源平盛衰記では、康頼と俊寛との間で、神に祈る意味があるかどうか論じられている。彼等の帰洛の願いが叶うことが示されるのは、次のように諸本で異なる。延慶本・源平盛衰記では、結願の日、今様を歌っていると奇瑞が現われる（延慶本の方が、歌、瑞相ともに多い）。そして、康頼が祝詞を奉ると、更に、檜の葉に御告げが記されて居り、帰洛を確信する。長門本では、精進潔斎して祝詞を奉り、三山を巡る、

いを聴きいれて、又、覚一本を始めとする他の当道系諸本では清盛の「悪行超過」のために春日大明神が清盛の首を刎ねたということ、重盛が夢見たことになっているのである。<sup>(注三)</sup>三島大明神や春日大明神は平家に対立し、直接手を下す神であるが、熊野権現は正確に未来を予言する神として位置付けられていると見做せようか。

重盛の嫡男維盛は、前述の重盛が家運を占った熊野参詣に同行していた(但し、四部合戦状本や当道系諸本のうち屋代本・小城本には具体的な名前は出ていない)。一の谷の戦いの後、維盛は屋島を抜け出して、高野山に詣で、滝口入道に会う。そして、粉河寺から(延慶本以外では源平盛衰記・小城本にある。但し、源平盛衰記の場合は、高野へはいる前に、「去ぬる治承の比 小松殿熊野参詣のついでにかの寺にまいりたりけるにかきをき給へるうちふた」を見る為に訪ねると、異なる。)藤代の王子に先ず参詣する。岩代の王子では湯浅宗光に山伏姿を見破られたが、宗光は礼して通っただけであった。岩田川にさしかかると、例の浄衣の色が変わったことを思い出し(延慶本・源平盛衰記・南都本・南都異本・当道系諸本のうち小城本・百二十句本にある)ながら、「悪業煩惱無始ノ罪障モ皆悉ク消ナル」ことを頼もしく感じる。本宮の証誠殿では、父重盛のことが思い出された(平松家本にはない)。彼も「極楽往生」を祈るのであったが、同時に、故郷に残した妻子の安穩も祈念されずには居られなかった。本宮を出て、維盛は終焉の海へ向かう。ここで諸本は、那智山——新宮——浜宮とする延慶本と新宮——那智山——浜宮とする、その他の諸本とに分かれる。源平

闘諍録・四部合戦状本以外では、那智山で(四部合戦状本は本宮とする)、平盛俊の伯父という山伏(源平盛衰記・南都本・四部合戦状本や当道系諸本は特にその素姓には触れない)が維盛と認めて、その変わり様を同行者に語って泣いたという。浜宮から船で漕ぎ出した維盛は、山成島に「名籍」を記し、更に沖に出る。そして、妻子への妄念を懺悔した後、滝口入道に勧められて入水を遂げたのであった。源平盛衰記を中心にして、重盛・維盛の死には熊野権現による「極楽往生」の思想がある。

維盛の死は武里によって屋島(弟資盛)に伝えられる。維盛の北の方は使者を屋島に送って、その死を知ったのであった。嘆く北の方に、乳母の女房が「高野山ニテ御クシ下シ 粉河熊野へ参て後世ノ事能く申 那智ノ濱ニテ念仏申 臨終正念ニテ終り給ケリ」と語って慰めている。又、維盛の入水を聞いた頼朝は「無<sub>レ</sub>隔<sub>レ</sub>打<sub>レ</sub>憑<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>タリセハ命計ハ奉<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>テマシ物ヲ」と言っ、惜しんだのであった。<sup>(注四)</sup>(南都本や当道系諸本のうち中院本・八坂本には頼朝の反応を記したところはない)。一方、長門本・東寺執行本によると、六代を警戒する人々は維盛の入水も重盛と同様の振る舞いと見做しているようだ(「心のたけき事」という表現もある)。

維盛の子六代は、文覚達の尽力で助命された後、十六歳になった文治五(一一八九)年の春、高野山に登り、滝口入道を尋ねている。そして、その足で維盛の跡を辿り、熊野三山を廻る(延慶本もここでは本宮——新宮——那智——浜宮となっている)。延慶本では、六代は浜辺に「石ヲ重テ塔ヲクミ砂ニ佛ノ御形ヲ書」き、維盛の供養を営んでいる。六代の熊野詣で

セ奉」つてい（四部合戦状本はこの言葉はない）、一代の栄花すら危く見える程であること、自分は父を説得することが出来ず、又、一門の衰退を見ることも忍びないことを挙げて、父の「悪心ヲ和ケ」るか、自分の「運命ヲ縮」るかの方を採って、宿運を示すよう（四部合戦状本では後者だけが祈念されている）祈ったのであった。その時（八坂本は或る夜とする）、重盛の頸（当道系諸本は「御身」とする）から「大ナル燈爐ノ光ノ様ナル物」が立ち上ったという。又、下向の時、岩田川（源平鬪諍録だけは「安部野」とする）で、同行の子息維盛・資盛の浄衣が喪服に見えたので、源季貞（源平鬪諍録は「先達」とし、その他の諸本は平貞能とする）が見咎めたが、重盛は「所願既ニ成就シニケル」と言つて、逆に「悦ノ奉弊（つやひ）」を行つた（源平鬪諍録は「悦ノ奉弊」などを欠く）。これ以後、重盛は、維盛に「無文ノ太刀」を贈り、「此大刀ヲ帶キ孝養ヲシ給ヘカシ」と請い（源平盛衰記・源平鬪諍録、当道系諸本のうち屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・小城本にはない）、頸に悪瘡が出て、清盛から宋の名医の治療を受けるように勧められても、「旁存旨候」と言つて受け付けず（当道系諸本のうち、小城本・両足院本は特にこのような表現はなく、「國ノ恥」という面からだけになっている）、死んで行つてしまふ。この逸話で、熊野権現は重盛に「入道ノ悪心ヲ和ケ」るか、「重盛カ今生ノ運命ヲ縮」めるかの、二者択一を迫られている。「権現金剛童子」は重盛の「運命ヲ縮」めることによつて、「榮耀一期ヲ限テ後昆ノ恥ニ及」ぶことを示したと言えるだろう。熊野権現は、清盛に対しては出世を、重盛には一門の滅亡を予言したことにな

つていたのである。

ところで、この重盛の祈願は周りの人にどう見られていたのであろうか。先記の後白河上皇のところに関係するが、延慶本・源平盛衰記によれば、上皇に重盛の臨終の様を尋ねられて、或る者が「熊野権現ニ申請テ給ハル悪瘡」だったので、「臨終正念ミタレス」、「往生極樂」と見えたと答えた由である。それで、上皇が先述のように自分も熊野参詣をしたいけれども、静憲達に洩らされたというのである。又、源平盛衰記・両足院本では、寿永二（一一八三）年七月の平家都落ちに当たつて、貞能が重盛の墓に参つて、「君はかやうの事かねてしろしめされて 熊野の権現に御祈誓候てとく失させ給ひけるにや」と搔き口説いている（覚一本などは「佛神三寶」とはいうが、「熊野権現」の名はみえない）。更に、平松家本以外の諸本には、熊野に参詣した維盛が「命ヲ召テ後世ヲ助給へ」と祈つた父を思い出すところがある。この外、延慶本・長門本・東寺執行本では、六代を警戒する人々が重盛について「世中ノ傾ムスル事ヲ兼テ知給テ熊野権現ニ申給テ世ヲ早シ」と見ていたことが記されている。静憲（「或人」と維盛は「往生極樂」に力点を置いているようであるが、それも含めて、重盛が「運命ヲ縮」めるよう祈願したというのが共通の認識となつていて、熊野権現の御告げ（予言）という面は殆んど浮かんでいない。猶、重盛の熊野参詣を延慶本・源平盛衰記、当道系諸本のうち覚一本・小城本・百二十句本・中院本・両足院本・八坂本は夢想に発したものとされている。即ち、延慶本・源平盛衰記や当道系諸本のうち中院本・八坂本では三島大明神が頼朝の願

されていた。その清盛の熊野詣でだが、こちらは対照的に延慶本に多く出て来る。まず有名な、清盛の出世を熊野権現の御利益とする記事「清盛繁昌之事」——清盛が鞍負佐であった頃（当道系諸本は安芸守の時代とし、源平鬪諍録には時期を示す語句がない）、伊勢路から熊野へ参詣したことがあったが、途上大きな鱸が船中に踊り込んで来た。先達が「巫文」をしてみた（当道系諸本には占つたという表現はない）ところ、「タメシナキホトノ御悦」「権現ノ御利生」と出た。清盛も周の西伯留（源平鬪諍録は「先公」とし、当道系諸本は武王とする）の船に白魚が飛び込んだという話を聞いたことがあると言つて（当道系諸本のうち百二十句本はこれを「せんだち」の言とする）、「サハカリ十戒ヲ持 六情根ヲ懺悔シ 精進潔斎シタル道」であつたが、料理して一行の者に一人残らず振る舞つたのであつた——これは、延慶本・長門本・源平鬪諍録、当道系諸本のうち覚一本・百二十句本・中院本・両足院本にある。そして、この後は「打ツ、キ悦ノミ在」つたとして、清盛の栄達振りが畳み重ねられて行く部分で、平治の乱についても、延慶本や源平鬪諍録は「平治ニ熊野詣シ給タリケル道ニ事出来テ 参詣ヲ不遂々道ヨリ下向シテ合戦ヲ致シ」（源平鬪諍録は後半が「還リ切目宿」又候御方ニ）と、それが熊野詣での途上で起こつたことを記すのである。

忠盛自身の熊野詣では源平盛衰記に、清盛の夜泣きから参詣したことが記されるだけであるが、清盛の熊野詣では右の通り、全て清盛自身の発意で行われている。延慶本には更に一つ、「入道登蓮ヲ扶持給事」の章段にも熊野参詣が記されている。時は保元の乱以前のことらしいが、二月末、秋

津の里で清盛が「秋津ノ里ニ春ソ来ニケル」と詠じたが、一行には、これに対する上の句を付けることが出来る者がいない。丁度そこに来かつた熊野下向の者の中から「見ワタセハ切目ノ山ニ霞シテ」と付けた者があつた。それが登蓮で、彼は連歌で、清盛の扶持を受けたのである。忠盛・清盛の熊野参詣には、このように、その途上での連歌の記事が含まれている。このようなことは重盛以下にはない。

重盛に移る前に、清盛の弟忠度に触れておきたい。忠度には現在の和歌山県東牟婁郡熊野川町音川を生地とする伝承があるということだが、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本では「畠山兵衛佐殿へ参ル事」に「熊野ヨリ生立テ心猛キ仁」と記されている。一方、当道系諸本のうち覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本には「忠度最期」（覚一本）に「熊野そだち大ぢからのはやわざ」とある（四部合戦状本はここにもある。猶、南都本や当道系諸本のうち屋代本・小城本・百二十句本・中院本・八坂本は忠度の「熊野そだち」に全く触れない）。当道系諸本のうち、覚一本を始めとして忠度を「熊野そだち」とする諸本（中院本も以下のことは同じ）は、忠盛が仙洞御所にもつていた「最愛の女房」、「雲井より」の歌を詠んだ女房を忠度の母とする。しかし、熊野と仙洞御所とをめぐる、忠度の生育についての説明はない。

重盛の熊野参詣は治承三（一一七九）年夏、薨ずる直前のものが唯一例、長門本（源平鬪諍録・南都本）を除く諸本に共通して記される。重盛は本宮大社証誠殿にこの時、父清盛が「悪逆無道ニシテ動スレハ君ヲモナヤマ

文治元（一一八五）年七月、京に大地震があつた時、上皇は「其程今熊野ニ御籠有ケルカ 折シモ御花マヒラセサセ給」うていたという。新熊野の記事は殆んどの諸本に共通しているので、「平家物語」では後白河上皇は基本的に新熊野と結び付けられて描かれていたと見て宜かろう。猶、このことと多少関係があるかと思われる記事が、延慶本・源平盛衰記の「院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事」の章段にある。清盛から、重盛の中陰に八幡宮への御幸があつたことを咎められて、静憲は上皇が、自分も重盛のように熊野に参詣して往生極樂を祈願したいが余りに遠いので「同シ西方ノ弥陀にテオハシマセハ 八幡宮ニ参詣シテ申サハヤト思食也」と言つて、御幸に及ばれた旨を答えている。これによれば、上皇は熊野参詣は遠すぎると思つて居られたことになる。

又、これは皇室と平家の両方に跨がることになるが、高倉天皇の母后建春門院が安元二年の初め頃、歩行で熊野参詣を遂げたことが延慶本・長門本の「建春門院崩御之事」に出ている。これは「先年不例ノ時御願ヲ果ム」として企てられ、建春門院は熊野本宮大社で胡飲酒の舞をまい、「サマノ靈瑞」を得たという。しかし、下向の後、間もなく病氣になり、七月崩御されている。建春門院の崩御は、思いも寄らぬ成り行きという点で、後出の重盛の薨去に酷似しているように見えるが、「平家物語」は特に脈絡を付けようとしていない（しかし、崩御が重ねられることで、不吉な、社会の変化の感じは残る）。

以上が御幸関係の記事の全てである。清盛を忠盛の子とすることが白河

上皇と忠盛の間で確認される記事、建春門院の崩御以外は殆んど「平家物語」全体の筋とは関係がない。しかも、その二記事も亦、関わり方は薄い方である。

### 三

次に、平家との関係を見て行くことにしよう。

清盛の父忠盛が白河上皇の北面の武士を務めていた時、上皇の熊野参詣に供奉して、糸鹿山で、三歳にまで育つた清盛について、上皇との約束を連歌で確認したという記事が、源平盛衰記・南都本・当道系諸本にあることは前述した。源平盛衰記には、更に同じ章段「忠盛皈人」の中で、清盛の夜泣きが止まないの、困却した忠盛が熊野本宮大社に祈願に行つたと、その折、証誠殿で「夜なくともた、もりたてよみとり子は清くさかふ」こともこそあれ」の託宣を得、以後、夜泣きが止んだこと、これ以後、忠盛は自分の子として育てたいと思うようになり、先述のように上皇との約束を確認して、その後、託宣の歌に因んで清盛と名付けたことが記されている（清盛の名前の由来とされる「夜なくとも」の歌は延慶本・長門本と屋代本・中院本を除く当道系諸本にもある。但し、前二本では心惑わせた女房の夢に浮かんだとされて居り、当道系諸本では話を聞いた上皇が詠んで送つたとされている）。以上が忠盛の熊野参詣記事であるが、これらは全て忠盛その人よりも清盛への関わりから記されている。

源平盛衰記を中心に、右の通り、清盛の幼年時代には熊野との関係が記



籠山」の記事によれば、三山参詣は白河上皇に始まったことになる。「那智籠山」には、この外、白河上皇の御幸の時、例の蛇貝を「海人」に見て来させたことも記されている。又、源平盛衰記・南都本・当道系諸本は、更に保安元（一一二〇）年（南都本・当道系諸本は特に年を記さない）に、平忠盛を北面の武士の一人に従えての御幸もあつたと記している。この時、糸鹿山（坂）で忠盛と上皇の間に連歌が交わされ、這う程に育つた男子（清盛）を忠盛の子とすることが確認されたというのである。

先に引いた「新院巖嶋へ可有御参事」の白河上皇の例に続けて、後白河上皇は日吉社に参詣されたことが挙げられていて、後白河上皇になると日吉信仰に取って代わられたかのような印象を与えるが、先に引用した「那智籠山」の回数に見られるように、後白河上皇は以前の上皇とは比較にならない程、御幸を重ねているのである。しかし、「平家物語」にはそのような熊野御幸は殆んど記されていない。僅かに後白河上皇の熊野御幸を記しているのは延慶本・長門本・源平盛衰記の三本である。これら三本の後白河上皇の熊野御幸記事の中で特色があるのは、源平盛衰記のそれである。

法皇は御出家の思出に熊野参詣あり 三山巡礼の後 瀧本にそとはを  
立られたり 智證門人阿闍梨瀧雲坊行真とそ銘文にはか、れたる

（「法皇熊野御参詣」）

この記事（「熊野大峯」に出て来る「そとはの銘」も同じものではないかと考えられる）は、先述の後白河上皇が出家後、最初に日吉社に参詣されたことが記される巻第十二より遙か前、巻第三に置かれている。この位置、

しかも「御出家の思出に」とあることから、読者は、上皇は最初に熊野に詣でたのであろうと思ひ込んでしまふ。このことは、源平盛衰記が上皇の熊野御幸を（史実通りに）押し出そうと図っていることを考えさせる。右の引用部に「瀧本」とあるが、源平盛衰記の引用部を始めとする一連の記事は、花山上皇の御幸の折の「験徳」を軸にした那智大社の由緒記とも称すべきものである。又、ここでは後白河上皇が「智證門人」として強調されていることも興味深い。延慶本・長門本の記事は「白山神輿山門ニ登給事」の章段で、安元三（一一七七）年二月、白山の衆徒が神輿を叡山に運んだ頃、上皇は熊野御幸で、京は留守であつたということである。以上のように、上皇の熊野御幸は余り記されていないが、仙洞御所法住寺殿の近くに勧請された新熊野神社のことはもつと多く出て来る。まず、上皇が新熊野神社を勧請したことは、「法皇法住寺殿へ御幸成事」の章段に「新日吉新熊野ヲモ近祝奉セ給テ」と記される（但し、八坂本には出て来ない）。

造営の年は永暦元（一一六〇）年、造営者は平清盛であつたが、そのような詳しい説明はない。猶、新熊野の前に新日吉が記されているのは、前述の「新院巖嶋へ可有御参事」の表現と対応しているように見える。或いは、この両記事は同じ時に（古く）記されたものではあるまいか。上皇がこの新熊野に参詣されるのが認められるのは「中宮御産有事付諸僧加持事」「大地振オヒタ、シキ事」の二章段である。前者において、「西面ノ小門」より御幸になった上皇は建礼門院の為に祈禱し、安徳天皇の誕生が無事済むと「新熊野御参詣可有ニテ念キ出サセ給」うたのであつた。後者において、

門人」と署名された辺りにも反映している。更に、田辺の新熊野も覚一本の「鷄合」に出て来る。

右のような熊野信仰を背景にして、熊野牛王の札に誓詞を記すことも見られる。延慶本・長門本・源平盛衰記には、土佐房昌俊が熊野牛王を取り寄せて誓い、焼いて呑んだことが出て来る（当道系諸本のものには「熊野牛王」という名称がない）。

熊野への道は康頼が行ったように、紀伊路の王子、王子を伝うのが普通であつたらう。しかし、「平家物語」では高野山から熊野へという道も、維盛の参詣などで印象的だ。又、「鱸」（覚一本）をみると、伊勢路は船旅でもあつたようだ。変わったものには、源平盛衰記の「同人清水状天神金」に紀伊半島を漕ぎ回る、その途中「新宮の浦」から熊野を伏し拝むという例もある。

## 二

有名な熊野御幸は、どのように描かれているだろうか。

歴代の上皇の熊野詣でを始めとして、熊野参詣をした人のことを最も詳しく記しているのは源平盛衰記である。上皇についての記述は「那智籠山」と「熊野大峯」の二章段に集中しているが、特に前者には「平城法皇 花山法皇 白河法皇三山五ヶ度 堀河院三山一度 鳥羽法皇三山八度 後白河法皇本宮三十四度新宮那智十五ヶ度」と歴代の上皇の参詣振りを数量化したものも付けられている。平城上皇については、「那智籠山」に御幸の記

録が「那智山の日記」なるものに見えるとし、次いで「康頼熊野詣」「熊野大峯」には「那智籠山」に出て来ない「寛平法皇の御修行」も記されている。この二人は源平盛衰記に簡単にその旨が記されるだけであるが、花山上皇の熊野御幸は源平闘諍録・延慶本を除く諸本に、その那智参籠の遺跡（桜）が残っているという形で記されている。最も詳しいのは源平盛衰記の「那智籠山」で、「瀧本」の「三年千日の行」「六十人の山籠」はその御幸から始まったとして、その折の「験徳」などが詳しく述べられている。即ち、上皇の御行の際に竜神が天降って、「如意宝珠一果 水精念珠一連九穴蛸貝一」を奉ったこと、宝珠は「岩屋」に、念珠は「千手堂」に納められて、現在も先達によって預かり渡されていること、蛸貝は「一瀧壺」に放たれたこと、妨げをなした天狗どもを安部晴明が「狩籠の岩屋」に祭ったことなどである。

さて、ところで、本格的な御幸は白河上皇の時代から始まったとされている。「平家物語」は、諸本にある「新院巖鳴へ可有御参事」の中で、高倉上皇の巖島参詣の希望を解しかねた者の間に答えて、或る事情に詳しい者が先ず「白河院ハ位ヲサラセ給テ後 先熊野へ御幸有キ」と語り始めることとで、「八幡 賀茂 春日 平野」（四部合戦状本・源平盛衰記、当道系の中院本は「春日 平野」を記さず、中院本を除く大半の当道系諸本は「平野」を記さない）以外への最初の御幸という点を強調しながら、この白河上皇の熊野御幸を紹介している（猶、源平盛衰記だけは問答の形をとらず、山門の衆徒の評定の内容として記している）。又、先の源平盛衰記の「那智

## 「平家物語」に描かれた熊野

橋口晋作

「平家物語」の時代、熊野権現は後白河上皇を始めとする京の貴族の篤い信仰を集めていた。「平家物語」にも重盛や維盛の熊野詣でが描かれ、鬼界島に流された平成経や康頼法師が熊野権現を祭って帰洛を願ったことが記されている。又、源頼朝に蹶起を促した人物とされる僧文覚の那智の滝での荒行も著名である。本稿は、このように「平家物語」に「ゆ、しく」（「徒然草」）記されている熊野のことを、その描かれた場所柄も含め、諸本に互って、なるだけ具体的に俯瞰してみようとするものである。

熊野三山と言われているが、本宮・新宮・那智ともに「平家物語」に描かれている。これら三山を巡る修行も、「惟盛熊野詣事」<sup>(注一)</sup>以下の一連の章段や「康頼油黄鳴ニ熊野ヲ祝奉事」以下の一連の章段に描かれていると見て宜いだろう。

三山それぞれはどのように描かれているのだろうか。重盛が「子孫ノ繁榮不絶シテ君ニ仕テ朝廷ニ交ルヘク」か、「榮耀一期ヲ限テ後昆ノ恥ニ及ヘ

ク」か、「冥助」を仰いだのは、諸本、本宮証誠殿の前としている。康頼の祝詞も延慶本・長門本、当道系諸本のうち鎌倉本・中院本・両足院本は証誠殿の前でとしている。一方、那智と言えば、先述のように文覚の荒行が浮かんで来る（但し、四部合戦状本と、当道系諸本のうち屋代本・八坂本には那智での荒行はない）。又、維盛が入水したのは「那智ノ澳」であった。これらに対して、新宮は十郎藏人行家の出身地ということしかないようだ<sup>(注二)</sup>（長門本・四部合戦状本、当道系諸本のうち平松家本・竹柏園本・鎌倉本・太山寺本には新宮という指摘はない）。四部合戦状本と当道系諸本のうち平松家本・竹柏園本・鎌倉本・太山寺本・八坂本とにない「熊野合戦」（覚一本）で、源氏方の本拠地というのは新宮ということになるか。「平家物語」で見ると、新宮は比較的宗教的雰囲気乏しく、源氏の小さな根拠地として、背景に沈んでいるようだ。

熊野権現は金剛童子と呼ばれている。本地は、本宮が阿弥陀如来、那智が千手観音、新宮が薬師如来である。阿弥陀如来は熊野の本地として屢挙げられる。しかし、薬師如来は延慶本の康頼の祝詞位にしか出て来ない。

熊野権現の勧請、熊野の分社もいくつか「平家物語」に出て来る。康頼が鬼界島に熊野権現を勧請して、参詣したということは源平闘諍録を除く諸本に記されている。分社としては、後白河上皇が御所、法住寺殿の近くに勧請された新熊野神社が著名である。又、三井寺に今熊野が祭られていることが「平家三井寺ヲ焼拂事」によって知られる。猶、熊野と三井寺との深い関わりは、源平盛衰記の「法皇熊野御参詣」に後白河上皇が「智證